

原著

承認欲求と種々のデモグラフィック要因

—性別、年齢、体型、結婚、そして職業—

鈴木 公啓・菅原 健介

Relationships between Need for Approval and Several Demographics

Tomohiro Suzuki and Kensuke Sugawara

要約

本研究は、これまで十分に扱われてこなかった、基本的属性との関わりをとおり、承認欲求の性質を改めて基本から明らかにすることを目的とした。基本的属性としては、性別と年齢、体型、そして、結婚の有無、職業を扱った。分析の結果、いくつかの関連が見出された。承認欲求が社会との関係性に影響していること、そして、承認欲求が社会との関係性の影響を受けていることが示唆された。よりよく社会に適応して生活を営む上で、承認欲求が基本的な部分でその役割を果たしていることが確認されたといえる。

キーワード

承認欲求, 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求, デモグラフィック要因

1. 問題および目的

社会に所属するためには、他者から受け入れられることが重要である。そのため、人は、相手が自分に対して肯定的なイメージを抱くように、もしくは、否定的なイメージを抱かないよう行動を調整している。この、人の心の中に組み込まれた「自己制御装置」の1つが「印象管理(自己呈示)」(cf. Arkin, 1981, Leary & Kowalski, 1990, Schlenker, 2005)である。この装置は「自分を他者から受け入れられる状態にすること(承認)」(菅原, 2004)を役割としている。

印象管理の背景にあり、他者に受け入れられようとする志向性(以下、承認欲求)には、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の2つの側面がある(菅原, 2004)。これは、印象管理における、他者からのプラスの評価の獲得とマイナスの評価の回避の2つの目的(Arkin, 1981, Leary & Kowalski, 1990)に対応している。これまで、この2つの欲求を測定する尺度の開発がおこなわれ、承認欲求の性質についての検討がおこなわれてきた。菅原(1986)は、「賞賛されたい欲求」と「拒否されたくない欲求」の2側面を測定する尺度を開発している。また、小島・太田・菅原(2003)は、菅原(1986)の尺度を発展させた「賞賛獲得欲求尺度」と「拒否回避欲求尺度」を作成している。そして、同時に、前者の研究においては、両欲求が対人場面において異なった方向に行動を導くこと、後者の研究においては、他者からの評価的フィードバックへの情緒的反応が両欲求によって異なることを明らかにしている。

それらの研究を踏まえ、承認欲求の2側面と様々な事象との関連性を検討した研究が、数多く積み重

ねられてきている。まず、自己呈示のイメージや行動との関連についての検討がおこなわれている（小島，2007）。そして、対人不安との関連（菅原，1998，佐々木・菅原・丹野，2001）や、あがりとの関連（飯田・鈴木・清水，2005，久保・鈴木，2007）についての検討もなされている。また、痩身願望との関連（馬場・菅原，2000，浦上・小島・沢宮・坂野，2009，鈴木，2012）や、装いとの関連（鈴木，2006）についての検討もおこなわれている。そのほかにも、告白との関連（菅原，2000），友人関係の特徴との関連（齊藤・藤井，2009），同性友人との対人葛藤時における対処行動との関連（本田・鈴木，2008），援助要請行動との関連（原田・出雲，2008），演技との関連（定廣・望月，2011），就職活動との関連（小島，2006），職場における評価への懸念との関連（太田・小島，2004），職務満足度との関連（小島・太田，2009a，小島・太田，2009b）など、広い範囲にわたる他の事象との関連についての検討がおこなわれてきている。

さらに、承認欲求の特性と状態についての検討もおこなわれている。従来は、承認欲求は個人内で安定した概念（小島・太田・菅原，2003）として扱われてきた。つまり、特性として扱われてきた。しかし、承認欲求は状況により変動する可能性があり、個々の場面における承認欲求が、その場面での行動に影響を及ぼしている可能性もある。また、特性としての承認欲求と行動との調整要因、もしくは媒介要因としての働きを有している可能性も考えられる。つまり、特性としての承認欲求（以降、「特性承認欲求」）だけではなく、状態としての承認欲求（以降、「状態承認欲求」）が存在し、それが各場面での行動に影響を及ぼしている可能性がある。鈴木・本田（2011）は、特性承認欲求にくわえて、状態承認欲求を扱い、状態承認欲求を測定するための尺度を作成したうえで、複数の場面における特性承認欲求および状態承認欲求と行動の関連の検討をおこなっている。そして、状態承認欲求は特性承認欲求と関連していること、行動と関連していること、そして、場面や行動によっては特性承認欲求と行動の媒介要因として働く場合があることを明らかにしている。鈴木・本田・小島（2010）や本田・鈴木・小島（2010）においても、同様の検討がおこなわれている。ただし、現時点では知見の積み重ねが十分ではなく、特性承認欲求と状態承認欲求の性質についてはさらに検討していく必要がある。

以上のように、承認欲求については、他の要因との関連性や、安定性など、様々な研究が積み重ねられているが、基本的な属性の影響についての検討がほとんどなされていないままにそれらの研究が進められてきたといえる。原田・出雲（2008），小島・太田・菅原（2003），そして菅原（1986）などにより性差の存在が示されてはいるが、それ自体に焦点をあてた検討がおこなわれているわけではない。また、全体的には拒否回避欲求は女性が男性よりも高いという結果が見出されているものの、賞賛獲得欲求については一貫した結果が得られておらず、性差についての知見そのものもまだ十分とはいえない。そして、企業従業員を対象とした小島・太田（2009a）や小島・太田（2009b），太田・小島（2004）などのごく一部の研究をのぞき、承認欲求の研究の多くが学生という限られた対象における性質を検討しており、年齢の影響などについては不明である。属性の影響そのものに焦点をあてた研究は見あたらず、今後、さらに承認欲求に関する研究を進めていくにあたり、承認欲求の基本的性質そのものを一度明ら

かにしておくことは、有用と考えられる。

そこで本研究においては、これまで十分に扱われてこなかった基本的属性との関わりをとおし、改めて承認欲求の性質を基本から明らかにすることを目的とする。なお、本研究では、性別、年齢、体型、結婚の有無、そして職業といった、生物学的特徴から社会的特徴までの比較的広い範囲におけるいくつかの基本的属性を扱い検討することにする。性別と年齢は特に生物的要因を、体型は生物的要因と社会的要因を、婚姻の有無と職業は特に社会的要因を反映している属性と考えられる。

2. 方法

(1) 被調査者

首都圏に居住する 20 代から 60 代の男性 927 名、女性 1022 名の計 1949 人を対象とした。性別と年齢層（10 歳刻み）別の人数を Table 1 に示す。

Table 1 対象者の性別と年齢層別の人数

	年齢					計
	20代	30代	40代	50代	60代	
男性	206	206	206	206	103	927
女性	203	206	205	203	205	1022
計	409	412	411	409	308	1949

(2) 調査時期

男性は 2008 年 7 月に、女性は 2010 年 8 月に実施した。

(3) 調査変数

承認欲求の 2 側面を測定するために、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原，2003）の一部の項目を実施し回答を求めた。賞賛獲得欲求については、「人と話すとき、できるだけ自分の存在をアピールしたい」、「自分が注目されていないと、つい人の気を引きたくなる」、「初対面の人にはまず自分の魅力を印象づけようとする」、拒否回避欲求については、「場違いなことをして笑われないよう、いつも気を配る」、「意見を言うとき、みんなに反対されないと気になる」、「不愉快な表情をされると、あわてて相手の機嫌をとる方だ」を用いた。合計得点を算出し（レンジは 3-12）、以降の分析に使用した。なお、得点が高いほど承認欲求が強いことを意味している。クロンバックの α 係数は、賞賛獲得欲求で $\alpha=.84$ 、拒否回避欲求で $\alpha=.73$ であり、内的整合性はある程度満たされているとみなした。

デモグラフィック要因である身長および体重、結婚の有無、職業についての回答を求めた。男女別の身長と体重、およびそれらから算出した BMI の平均値と標準偏差を Table 2 に、男女別の結婚の有無を Table 3 に、職業を Table 4 に示す。

Table 2 男女別の身長, 体重, そしてBMI の記述統計量

		平均値	SD
身長 (cm)	男性	170.91	5.66
	女性	157.73	5.32
体重 (kg)	男性	68.02	11.05
	女性	52.64	8.34
BMI	男性	23.26	3.42
	女性	21.15	3.19

Table 3 男女別の結婚の有無

	結婚の有無		合計
	未婚	既婚	
男性	409 44.1%	518 55.9%	927
女性	334 32.7%	688 67.3%	1022
合計	743 38.1%	1206 61.9%	1949

Table 4 男女別の職業

	職業										合計	
	公務員	経営者 ・役員	会社員 (事務系)	会社員 (技術系)	会社員 (その他)	自営業	自由業	専業主婦	パート・ アルバイト	学生		その他
男性	35 3.8%	37 4.0%	168 18.1%	246 26.5%	144 15.5%	84 9.1%	37 4.0%	0 0.0%	43 4.6%	56 6.0%	77 8.3%	927
女性	7 0.7%	8 0.8%	145 14.2%	30 2.9%	41 4.0%	22 2.2%	18 1.8%	452 44.2%	207 20.3%	38 3.7%	54 5.3%	1022
合計	42 2.2%	45 2.3%	313 16.1%	276 14.2%	185 9.5%	106 5.4%	55 2.8%	452 23.2%	250 12.8%	94 4.8%	131 6.7%	1949

(4) 手続き

調査会社を介してインターネット調査をおこなった。回答者にはポイントが付与された。なお、他の調査も併せて同時に実施している。

3. 結果

はじめに、生物学的要因を強く反映すると考えられる性別および年齢と承認欲求との関連を検討した。男女別および年齢層別（10歳刻み）の賞賛獲得欲求得点と拒否回避欲求得点を Figure 1 に示す。性別と年齢およびそれらの交互作用項を独立変数、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求をそれぞれ従属変数とした一般線型モデルにて分析をおこなった。賞賛獲得欲求については、性別の主効果と年齢の主効果がどちらも有意であることが示された（それぞれ、 $F(1,1945)=11.73, p<.001$, $F(4,1945)=36.91, p<.001$ ）。交互作用については有意ではなかった（ $F(1,1945)=1.62, n.s.$ ）。拒否回避欲求については、性別の主効果と年齢の主効果がどちらも有意であることが示された（それぞれ、 $F(1,1945)=3.86, p<.05$,

$F(4,1945)=137.1, p<.001$)。交互作用については有意ではなかった ($F(1,1945)=0.13, n.s.$)。以上、年齢にかかわらず、男性は女性よりも賞賛獲得欲求が高く、また、女性は男性よりも拒否回避欲求が高いことが示された。また、男女ともに、年齢が高いほど、両欲求が低いことが示された。以降は、属性の回答や分類の問題を考慮し、男女別に検討をおこなうことにした。また、会社員については1つにまとめることとした。

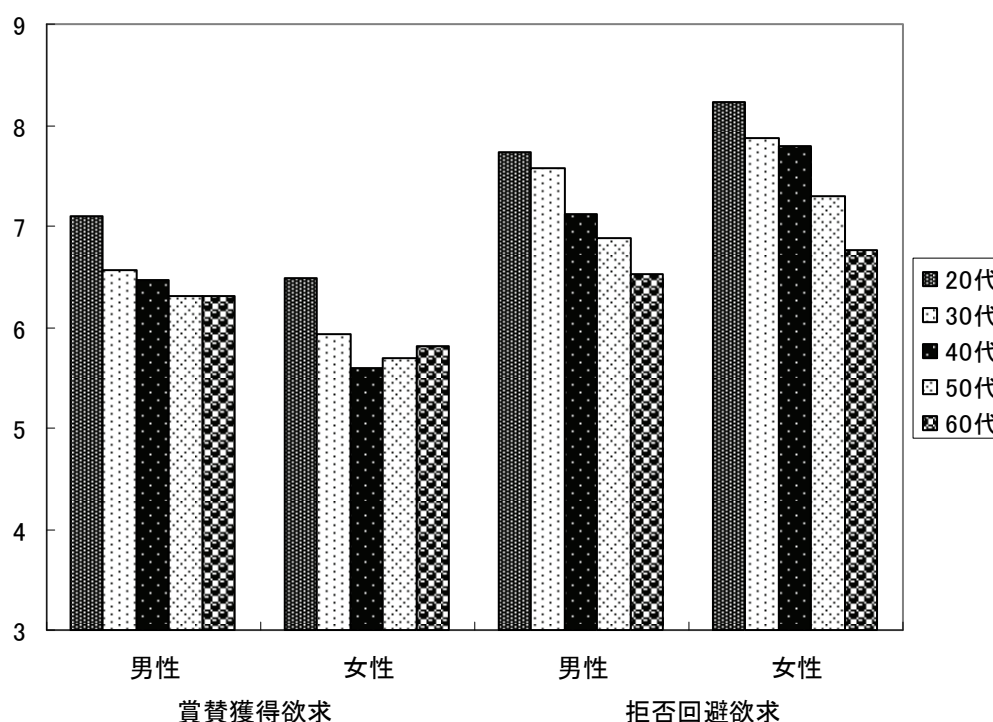


Figure 1 性別と年齢層別の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

次に、性別毎に年齢以外のデモグラフィック要因と承認欲求との関連について男女別に検討した。職業については以下のとおりである。男女それぞれにおける、職業別の賞賛獲得欲求得点と拒否回避欲求得点を Figure 2 と Figure 3 に示す。分散分析の結果、男性は賞賛獲得欲求と拒否回避欲求共に、職業による違いが認められた (それぞれ, $F(7,919)=3.18, p<.01$, $F(7,919)=4.46, p<.001$)。女性は、賞賛獲得欲求に違いは認められなかったが、拒否回避欲求には違いが認められることが示された (それぞれ, $F(8,1013)=1.85, p=.064$, $F(8,1013)=3.32, p<.001$)。BMI については以下のとおりである。男性においては、BMI は賞賛獲得欲求と拒否回避欲求ともに、関連は認められなかった (それぞれ, $r=-.024$, $-.077$)。女性においても、BMI は賞賛獲得欲求と拒否回避欲求ともに、関連は認められなかった (それぞれ, $r=-.068$, $-.047$)。そして、結婚の有無については以下のような結果であった (Table 5)。男性では賞賛獲得欲求に違いは認められなかったが、拒否回避欲求には違いが認められた。また、女性では、両欲求にて違いが認められた。

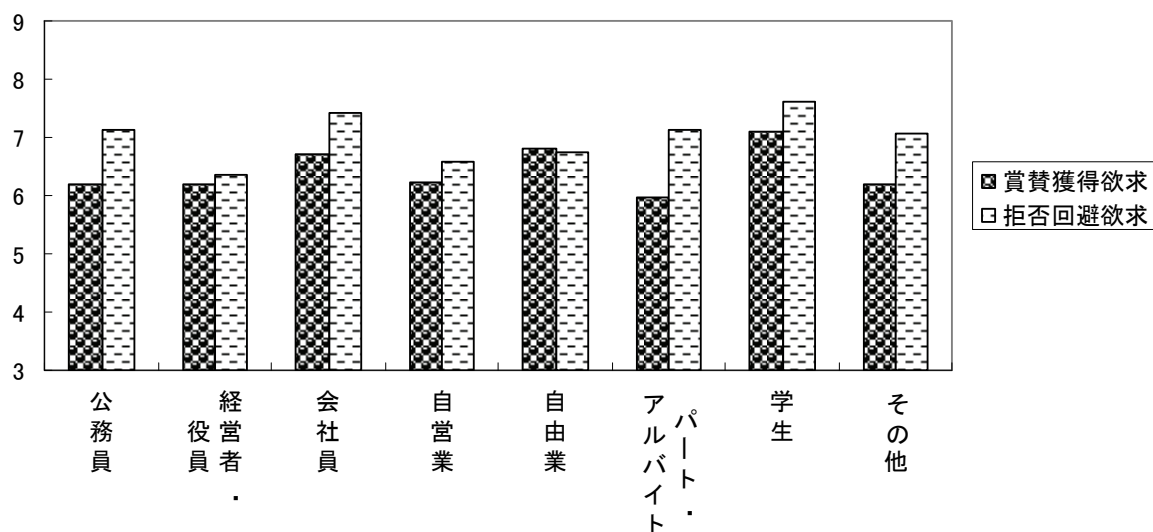


Figure 2 職業別の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求（男性）

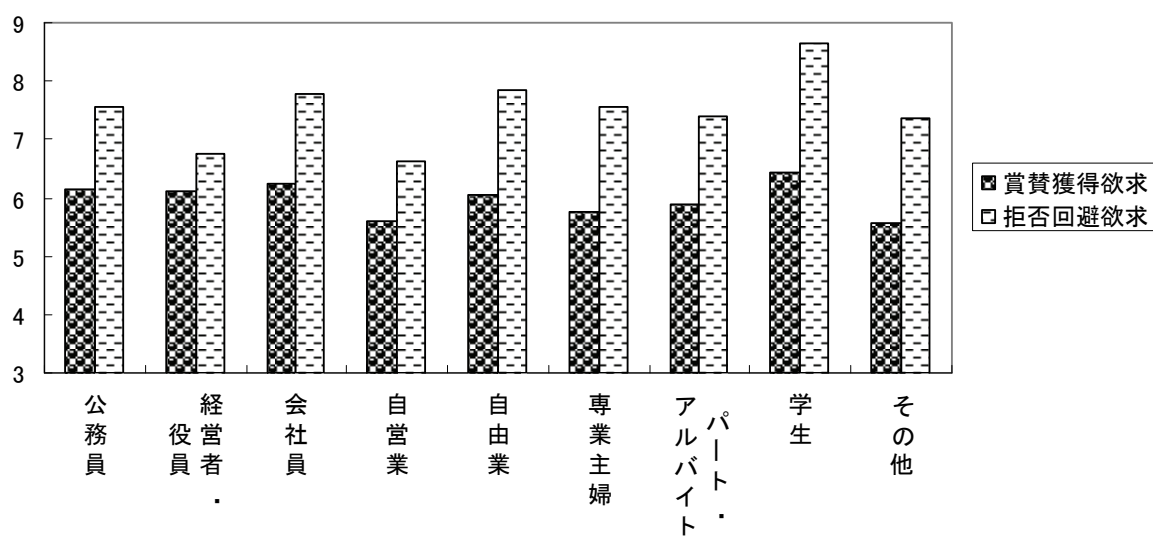


Figure 3 職業別の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求（女性）

このように、いくつかのデモグラフィック要因と承認欲求との関連が示されたが、それらは年齢の影響によって生じたものである可能性が考えられた。そこで、年齢の影響を統制したうえで、各デモグラフィック要因の影響を確認することとした。また、職業として学生を選択した者のうち、男女ともに9割が20代と、データの偏りも確認されたため、以降は学生のデータを除外することとした。さらに、職業で「その他」と回答した者についても、その曖昧性のためデータを分析から除外した。そのため、それらを除いた男性871名および女性984名の計1855名のデータで以降の分析を進めることにした。

Table 5 結婚の有無別の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

			平均値	SD	t	df
男性	賞賛獲得欲求	未婚	6.59	2.10	0.14	763.87 n.s.
		既婚	6.57	1.66		
	拒否回避欲求	未婚	7.43	2.04	2.72	780.69 **
		既婚	7.09	1.66		
女性	賞賛獲得欲求	未婚	6.12	1.92	2.58	1020.00 *
		既婚	5.80	1.86		
	拒否回避欲求	未婚	7.79	1.97	2.41	593.85 *
		既婚	7.49	1.74		

注：男性の未婚はN=409, 既婚はN=518, 女性の未婚はN=334, 既婚はN=688。

* $p < .05$, ** $p < .01$

ここで、性別毎に年齢の影響を統制したうえでの他のデモグラフィック要因の影響を確認するために、各デモグラフィック要因を独立変数、賞賛獲得欲求および拒否回避欲求をそれぞれ従属変数とした一般線形モデルにて分析をおこなった (Table 6)。分析の結果から、男性と女性ともに、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求には年齢が関連していること、また、男性の賞賛獲得欲求については、年齢に加え、結婚の有無と職業が関連していることが示された。結婚の有無においては、賞賛獲得欲求の調整済みの平均値は、未婚で6.22 (N=324), 既婚で6.59 (N=470) であり、既婚の方が高値であった。職業においては、例えば拒否回避欲求の平均値は、「経営者・役員」が他よりも低値であることなどが示された (Figure 4)。女性においては、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求ともに、年齢以外の関連は認められなかった。

Table 6 各デモグラフィック要因を独立変数、承認欲求を従属変数とした一般線形モデルの分析結果

		賞賛獲得欲求	拒否回避欲求
男性	年齢	$F(1,785)= 17.48 ***$	$F(1,785)= 29.91 ***$
	BMI	$F(1,785)= 0.01 n.s.$	$F(1,785)= 0.61 n.s.$
	結婚	$F(1,785)= 5.76 *$	$F(1,785)= 0.15 n.s.$
	職業	$F(5,785)= 2.04 †$	$F(5,785)= 2.54 *$
女性	年齢	$F(1,920)= 4.67 *$	$F(1,920)= 63.91 ***$
	BMI	$F(1,920)= 1.38 n.s.$	$F(1,920)= 0.37 n.s.$
	結婚	$F(1,920)= 1.91 n.s.$	$F(1,920)= 0.13 n.s.$
	職業	$F(6,920)= 0.31 n.s.$	$F(6,920)= 1.41 n.s.$

注：† $p < .10$, * $p < .05$, *** $p < .001$

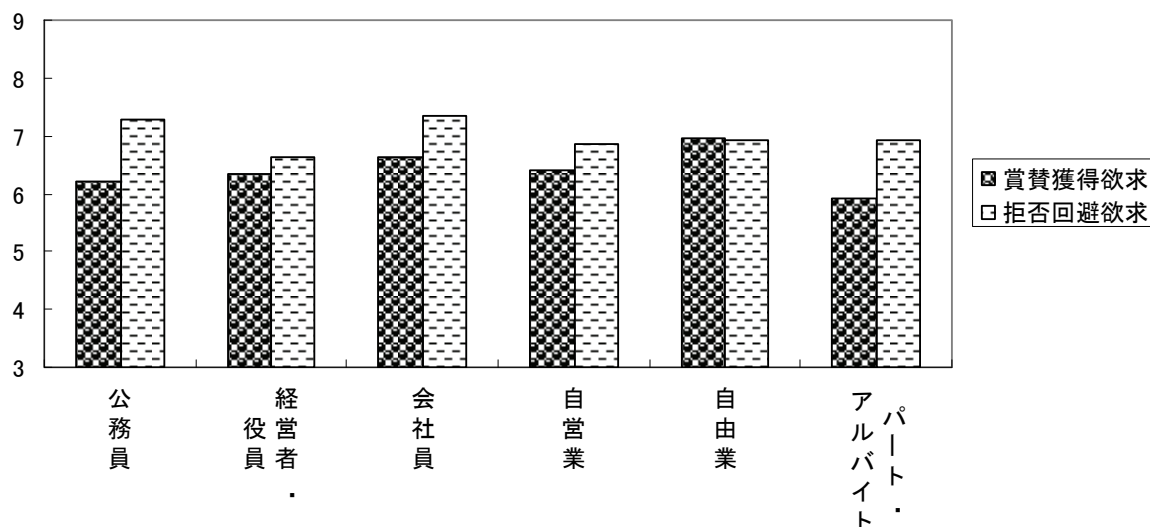


Figure 4 職業別の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求（男性・調整済みの平均値）

4. 考察

本研究により、承認欲求の基礎的な性質についての知見が得られたと考えられる。まず、承認欲求には性差があること、そして、年齢が高いほど承認欲求が低くなることが示された。これらについては、以下のように考えられる。

男性は、賞賛獲得欲求については女性よりも高値であるが、拒否回避欲求については女性よりも低値であった。現代社会では、男性の方が積極的に社会にて活動することが求められることが多い。それは、仕事においてもそうであるし、対人関係においても同様である。そのような社会において、より積極的な活躍を促進すると考えられる賞賛獲得欲求が喚起しやすくなっていると考えられる。また、女性特有の対人関係や集団のありかたが拒否回避欲求の高さに影響している可能性がある。この点については、今後、関係性なども含めて検討することが有用といえる。

年齢については、これも同様に、社会との関わり方の影響が考えられる。若年層は、社会的立場がまだ安定していない。様々な場面で、新たに他者と出会い、お互いに評価をおこないつつ関係を構築していく必要がある。そして、その頻度は少なくない。そのような場面で、繰り返し新たな関係を築きつつ、集団内での自分の位置づけを固め、そして自身を社会に一層適応させていく必要がある。また、異性との親密な関係性を構築し、最終的に伴侶を得る必要がある。そのような点でも、目的を達成するために、他者を意識し、他者からの承認を得るように動機づけられる必要があるといえる。このように、若年層では、成長段階として社会に適応していく必要が特に求められることから、他者の評価に敏感になり、そして、他者からの承認を志向することが重要となり、結果として、承認欲求が高くなっていると考えられる。一方、年齢が高いほど社会的立場は安定している。仕事での地位、家族や住んでいるコミュニティなどの中での位置づけは、これまでの関係性の構築の積み重ねによって、年齢が高くなるほど安定

してくるといえる。関係性が十分に構築されている高齢層では、改めて他者の承認を得る機会、そして必要性は低下する。つまり、若年層ほどには日々の生活で他者の評価を意識し承認を獲得しようとせずとも、安定して社会と関わっていることができる状況と考えられる。そのため、他者からの承認を得ようにはそれほど動機づけられず、承認欲求が低めの状態にあるのだといえる。

性別と年齢について、今回は生物学的背景が多分に反映されている要因として扱っているが、実際に生物学的要因の影響がどの程度反映されているかは不明である。生まれ持った性別が故に社会から求められるものが異なり、その求められる姿に合わせて適応する過程で、承認欲求がその影響を受けている可能性も考えられる。つまり、性別の場合、sexによって規定されているのか、genderによって規定されているのかは不明である。しかし、社会の要請を受けて、社会的要因を媒介したうえでの、性別の承認欲求に及ぼす影響の一端は明らかにすることができたといえる。これについては、年齢においても同じことがいえるであろう。

また、男性において、年齢の影響を除いたうえでも、結婚と賞賛獲得欲求が関連しており、結婚しているほど賞賛獲得欲求が高いことが示された。これは、賞賛獲得欲求が高いほど積極的なアピールをおこなうなど、結婚に関して積極的に行動したことが反映されている可能性がある。菅原（2000）においても、賞賛獲得欲求が告白行動を促進していることが示されている。昨今の所謂「つきあっている人がいる人の割合の低さ」や「結婚しない人の増加」などには、賞賛獲得欲求が関連している可能性もある。これまで、この点についての検討はなされてはいないが、婚活場面での承認欲求の働きを明確にすることができたならば、より現実に即した形での介入などを考えることができるかもしれない。賞賛獲得欲求の低さが結婚への阻害要因となっている可能性は無視できないことといえる。

職業については、男性においてのみ影響が認められ、年齢の影響を制御したうえでも、職業によって拒否回避欲求に違いが認められることが確認された。女性においては、多くの割合が専業主婦であるなど、男性とは職業の割合が異なっている。男性では選択肢が幅広い分、そこに、個人特性が反映されやすい可能性がある。また、元々の特性としての承認欲求が仕事への指向性を規定した可能性、逆に、承認欲求が就いた職業の影響を受けた可能性の両者が考えられる。その点は、縦断的調査などにより検討することにより、明確にしていくことができるであろう。少なくとも、今回の結果からも、承認欲求が社会との繋がりの中かで一つの役割を果たしていることが確認されたといえる。

以上、本研究により、承認欲求と基本的な属性との関連について明らかにすることができた。そこからは、多分に承認欲求が社会との関係性に影響していること、そして、承認欲求が社会との関係性の影響を受けていることが示唆された。よりよく社会に適応して生活を営む上で、承認欲求が基本的な部分でその役割を果たしていることが確認されたといえる。

引用文献

- Arkin, R. M. (1981). Self presentation styles. In J. T. Tedeschi (Ed.), *Impression Management: Theory and Social Psychological Research*. New York: Academic Press. pp.311-333.
- 馬場安希・菅原健介 (2000). 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, **48**, 267-274.
- 原田克巳・出雲麻佑 (2008). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が援助要請行動とその抑制要因に与える影響 金沢大学教育学部紀要教育科学編, **57**, 45-56.
- 本田周二・鈴木公啓 (2008). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が対人葛藤時の対処行動に及ぼす影響 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, **5**, 143-147.
- 本田周二・鈴木公啓・小島弥生 (2010). 状態承認欲求と特性承認欲求の関連について(2)―状態承認欲求を媒介要因とした検討― 日本パーソナリティ心理学会第 19 回発表論文集, **92**.
- 飯田奈津江・鈴木公啓・清水直治 (2005). あがりと授業における集団構造との関連―授業におけるあがり尺度および集団構造尺度の作成を通して― 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, **88**.
- 小島弥生 (2006). 自己呈示としての就職活動に関する探索的研究―準備活動, 日常生活での自己呈示スタイルおよび評価欲求の影響について― 埼玉学園大学紀要(人間学部偏), **6**, 59-70.
- 小島弥生 (2007). 日常生活における自己呈示と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 立正大学心理学研究所紀要, **5**, 1-11.
- 小島弥生・太田恵子 (2009a). 企業従業員の職務満足度と人事評価システムの捉え方との関連 産業・組織心理学研究, **22**, 75-86.
- 小島弥生・太田恵子 (2009b). 企業従業員の職務満足度に関する研究：職場での評価のあり方に対する認知と賞賛獲得欲求の影響力に着目して 大妻女子大学人間関係学部紀要, **11**, 73-82.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 久保由紀子・鈴木公啓 (2007). 社会人のあがりと自己呈示に関わる個人特性との関連 日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会発表論文集, 144-145.
- Leary, M. R. & Kowalski, R. M. (1990). Impression management : A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, **107**, 34-47.
- 太田恵子・小島弥生 (2004). 職場での評価をどう意識するか 菅原健介 (編著) ひとの目に映る自己 「印象管理」の心理学入門 金子書房 pp.153-180.
- 定廣 英典・望月聡 (2011). 演技パターンに影響を与える諸要因の検討―日常生活演技尺度の作成および賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 パーソナリティ研究, **20**, 84-97.
- 齊藤茉莉絵, 藤井恭子 (2009). 「内面的関係」と「表面的関係」の 2 側面による現代青年の友人関係の類型の特徴―賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および充実感からの検討― 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **58**, 133-139.

- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 (2001). 対人不安における自己呈示欲求について 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から 性格心理学研究, **9**, 142-143.
- Schlenker, B. R. (2005). Self-Presentation. In M. R. Leary & J. P. Tangney (Eds.) *Handbook of Self and Identity*. New Ed. New York: Guilford Press. pp.492-518.
- 菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究, **57**, 134-140.
- 菅原健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, **7**, 22-32.
- 菅原健介 (2000). 恋愛における「告白」行動の抑制と促進に関わる要因 異性不安の心理的メカニズムに関する一考察 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, **230-231**.
- 菅原健介 (2004). ひととはなぜ他人の目が気になるのか? 菅原健介 (編) ひとの目に映る自己 「印象管理」の心理学入門 金子書房 pp.1-23.
- 鈴木公啓 (2006). 装いと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 パーソナリティ研究, **14**, 230-231.
- 鈴木公啓 (2012). 瘦身願望および瘦身希求行動の規定要因—印象管理の観点から— 心理学研究, **83**, 391-399.
- 鈴木公啓・本田周二 (2011). 特性承認欲求の安定性の確認, および, 状態承認欲求の行動規定因としての性質についての予備的検討 東洋大学大学院紀要, **47**, 29-43.
- 鈴木公啓・本田周二・小島弥生 (2010). 状態承認欲求と特性承認欲求の関連について(1)—状態承認欲求を調整要因とした検討— 日本パーソナリティ心理学会第19回発表論文集, **91**.
- 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二 (2009). 男子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, **57**, 263-273.

注

本研究は(株)ワコールとの共同で行われた調査の一部である。